

第4回 幼児教育実践学会

主題 広く、深く、ていねいに子どもの遊びを捉え保育の質を考える

—教師の指導性に視点を置いて—



・日時 平成25年8月23日（金）～24日（土）

・場所 福岡ガーデンパレス

学校法人水谷学園認定こども園

北陵幼稚園

〒699-0624 島根県出雲市斐川町3337番地

主題 広く、深く、ていねいに子どもの遊びを捉え保育の質を考える
—教師の指導性に視点をおいて—

北陵幼稚園

1. はじめに

(1)地域の実態

島根県の東部に位置している斐川町は、昭和59年7月に銅剣(358本)銅鐸(6個)が出土した町として知られている。また島根県は古事記編纂1300年という節目を向かえ、島根県出雲地方は奥深い歴史に彩られたロマンあふれる町である。

北陵幼稚園を取り巻く環境は、西に五右衛門川が流れ、近年、住宅地、商業地としての発展が見られる。また、町立図書館、公立幼稚園、保育園、小学校、中学校があり学園都市としての機能もあり保幼小中の連携を深めながら地域に根ざした活動を進めている。

(2)園の実態

平成15年に開園した幼稚園である。その歴史はまだ浅いが、平成25年から認定こども園として認可を受け、幼稚園と保育園の両方の機能を持ち出雲市では初めての認定こども園として出発をしたところである。

園児は素直でやさしい子どもが多い反面、自己中心的であったり、困難なことに会おうと大人に解決を求め自ら考えたり、工夫していく力が乏しい面が見受けられる。保護者は教育に対して非常に前向きで、教師の考えを一生懸命受け入れる態度があり、子ども、親、教師の三拍子で教育を語ることができている。

2. 主題設定の理由

子どもたちの遊びは見たり、聞いたり、触れたりする全てから出発すると考える。子どもたちの興味・関心は無限大であり、そのことが子どもたちの遊びのエネルギーとなっていくと思う。すなわち子どもたちの遊びは生活そのものであり、生活全てである。その遊びを教師はどのように受け止め理解していくかについて、教師の指導性が問われていくと考える。その関係性こそ本主題につながるものである。

子どもたちの遊びは一樣ではなく常に変化をしていくものである。何故子どもたちの遊びが幼児期の成長に欠かせないものかを考えてみると、子どもそのものの成長発達のために必要不可欠でありその遊びを自ら創り出していく過程全てが学びであり、子どもたちの心身の発達につながっていくことになると思う。すなわち、全ての生活は子どもたちにとって欠かせない学習であると理解する。

このような視点で本主題を考えると子どもたちの遊びの『広く』『深く』を捉える時、『広く』は子どもたちが見たり触れたり感じたりする全てから出発していくと考える。雨が降ると「なぜ雨は降るの?天の神様がお掃除したの?」とじつくりと空を見上げていく。一瞬の出来事のように思えるが、その場面は子どもたちの心を確かに揺り動かしているのである。子どもたちの興味関心がこのようなつぶやきや行動になっていくのである。このつぶやきを教師はどのように受け止め、子どもと共有していくかが指導性にかかわってくるように思う。子どものつぶやきを側でそっと聞いているか、または「そうね・・・神様がお掃除してるね・・・」と教師も静かにつぶやき共有するか、または、全く気づかないで逃してしまうか、教師として何を子どもと共有していくかが教師の指導性になると考える。このことは子どもたちの発達を踏まえたものでなければならないと思う

次に『深く』の捉えである。子どもたちの遊びを追ってみると思うままに遊んでいるだけではない。常になぜ?どうして?と心が動いている。もっと知りたい、もっと続けたいという意欲が見え隠れしてくる。子どもたちの興味関心が強ければ強いだけ子どもたちは必死に遊びに取り組むのである。その一つひとつの遊びを子どもと共に遊びを創造(想像)していけばより深く遊びに向かうことができる考える。子どもたちの興味関心から遊びを広げ深めていく過程を子どもと共に創りあげていけば本主題に迫ることができる考える。

3. 研究の仮説

- ・子どもたちの遊びを「広く・深く」捉えていけば子どもたちの遊びの方向性、内面理解につながり豊かな活動を生み出していくであろう。
- ・子どものつぶやき、会話を聞きのがさないで受け止め子どもと共に遊びを楽しめば、教師の指導性が明確にもてるであろう。

4. 研究の目標

- ・子どもたちの遊びと教師の指導性との関連を日々の保育活動を通して実践し、子どもたちの遊びの『広く』『深く』を丁寧に分析、考察しながら教師の指導性から究明していく。

5. 研究の内容と方法

1)子どもの心の動きを捉え、豊かな活動を引き出す教師の指導性

- ①子どもの「なぜだろう」「どうしてだろう」という思いに寄り添いながら、子どもの遊び理解をする。
- ②子どものつぶやき、子どもの会話を記録し、遊びの深まり、遊びの行方を見守り教師の指導性を明らかにする。

2)子どもの遊びの『広がり』『深まり』を記録分析し、遊びが発展していく過程を明らかにする。

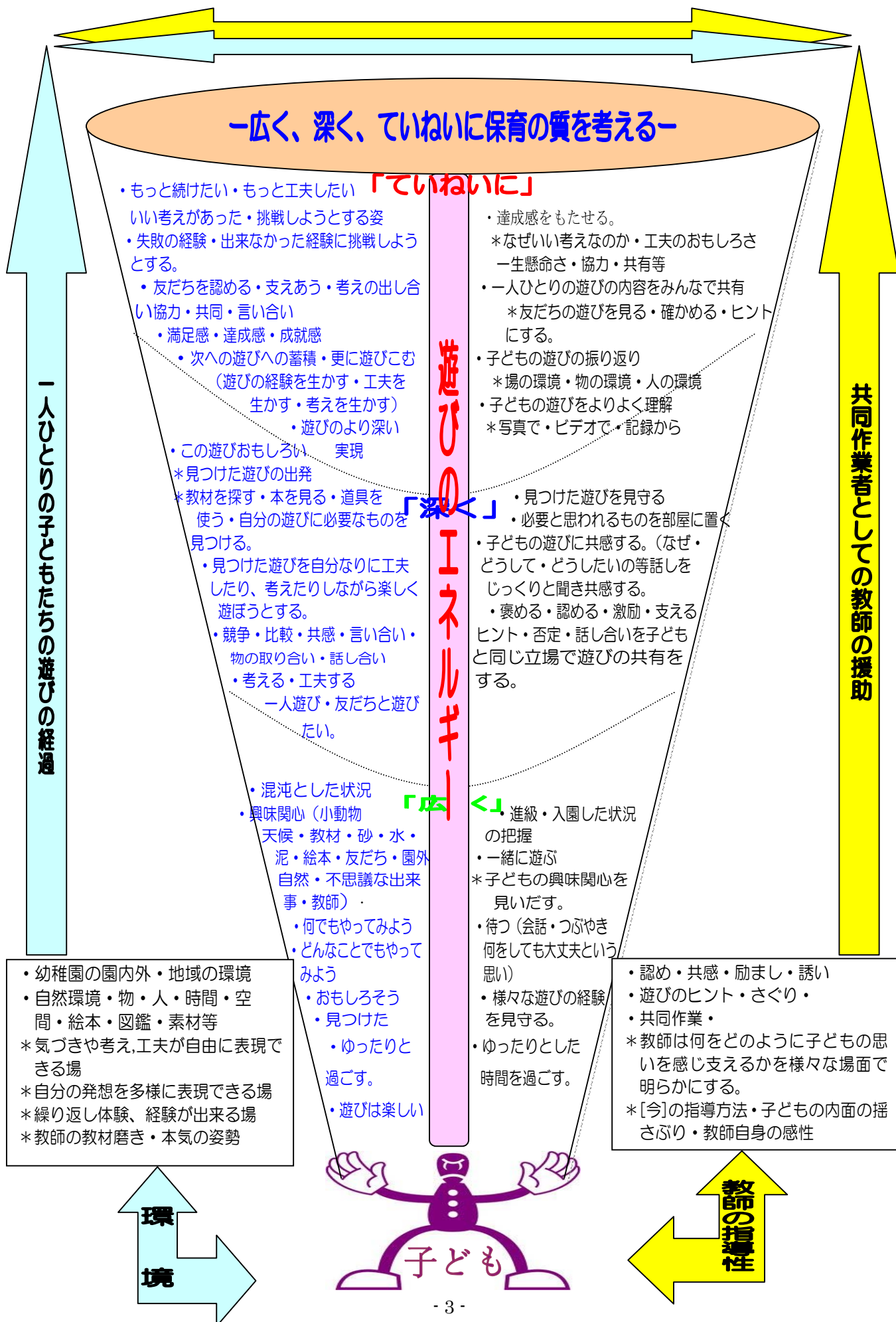
- ①子どもにとって興味関心のある遊びの広がり、深まっていく過程を環境との関連性から明らかにする。
- ②子どもたちの発達から遊びの行方を見守り、支えるための丁寧な指導方法を工夫する。

6. 主題を受けて育つ子ども像

- ①興味関心をもって自ら遊びに取り組む子ども
- ②好奇心(なぜだろう・不思議だ)や探究心(調べよう・考えよう・続けよう)をもって遊べる子ども
- ③自然とのふれあい、地域とのふれあいを通して、やさしく思いやりがもてる子ども
- ④小動物・植物など『命』あるものと触れ合いながら、『命』を大切にする子ども
- ⑤困ったことや苦手なこと、困難なことに諦めずに最後までやり遂げる力をもつ子ども
- ⑥音楽・絵画・表現など心豊かな表現活動を楽しむ子ども

7. 実 践

- 1)3歳児(つばめ組) もぐらのおうちごっこ
- 2)4歳児(はと組) 乗り物遊びから
- 3)5歳児(ふくろう組) 紙飛行機の遊びから



1)3 歳児(つばめ組)の実践 ―もぐらのおうちごっこ―

北陵幼稚園の開園と同時に植えられたプラタナスの木が大きく成長してきた。その大木はここ数年子どもたちの遊びを生み出す大きな環境としてどっしりと根付いてきている。つばめ組の部屋の前にあり、4月の入園の頃は葉っぱも小さく赤ちゃん葉っぱと言っているが、連休明けにも入ると大きな葉に成長して子どもたちにとっては目を見写る巨大な森のように変身を遂げている。

今年もこのプラタナスの木から子どものドラマが始まるのである。

2歳児からの継続児9名、新入児10名の19名のクラスである。幼稚園に慣れている子、初めての集団生活で泣いている子と様々である。大きなプラタナスの木の下では砂や水の遊びがはじまり子どもたちの心の安定基地になりつつある。

視 点	幼児の活動	教師の指導性と考察
広	・新入園児は泣きながらも、園庭で砂や水の遊びをはじめている。継続児は様々な素材を使って砂や水での遊びを楽しんでいる。 ・一方、継続児は園庭の遊具を使って遊ぶなど、自ら見つけ出した遊びを楽しんでいる。 「先生!来て!」「見て!見て!」「ほら!!ほら!」と気づいたことや、驚いたことを教師に伝える姿がある。きちんとした話し言葉ではないが、目の輝きがある。進級した喜びをもって生活をしている。  友だちと同じ場を共有することで安心感をもつ。  「たらいに水いれて!」「いっぱいにして!」 ・子どもの遊びからの会話やつぶやき K 児「わ～お山がお水飲んだよ～喉が渴いてるね・・・」 S 子「アリさんは噛むから殺さないで!」 T 児 思わずつぶす S 子「痛いって言ってるよ・・・」 T 児 少し考えて悪そうな表情をする。 R 児「僕ブロッコリー大嫌い!でも給食の先生が食べるといいねと言ったから頑張って食べたよ」完食	 ・プラタナスの木の下や、園庭の遊具で遊ぶ子どもたちと一緒に遊び、子どもたちのつぶやきを聞くなどして、子どもたちの内面をしっかりと受け止めることが大切である。  ・ダンゴ虫探しを無心に行っている。  ・子どもたちの興味・関心を思う存分発揮して遊ぶためには、身近な環境に教師自身がしっかりと目を向けることができているかについて問い直す必要がある。 ・子どもたちが思う存分遊ぶための時間・空間の確保が必須である。 ・子どもたちのつぶやきや会話は宝の言葉であると認識している。大人にとっては些細に思える言葉でも、子どもの発する言葉には深い意味があり、その意味を本気で理解しながら、次の活動につなげなくては教師の存在

広

J子「もぐらさんかわいいね。会いたいね」
会話が広がっている。
・帰りの会で教師は『もぐら』の話をする。
・次の日、子どもたちの遊びに変化が出てきた。



もぐらの道作りに発展していく。



もぐらのプールを作ってもぐらが遊ぶ場を作る。

・それぞれの子どもたちが、『もぐらさん』という言葉で共有できるようになってきた。
K児・T児はもぐらの道作りをする。桶を長くつなげて黙々と砂を載せて長い道を作る。
T児「先生 ここをモグラが通るよ！見て！」
とうれしそうである。

R児はもぐらのプール作りをする。T「もぐらさん、水の中好き？」「そうプール大好きだよ」
S子・K子・T子はモグラの栄養作りが始まる。
「栄養を食べないと出てこれないよ」

く

W子・J子はもぐらの誕生会をしようと計画をする。庭にあるプランターの花をちぎって大きなケーキに飾る。W子「お誕生日おめでとう！と言うの」J子「そうだよ 誕生会はうれしいが・・・」と話している。

・一方『もぐら』に全く興味を示さない子もいる。当然である。自分たちの遊びをそのまま続けられればいいと思う。

I児、タライの水を入れたり出したり、ペットボトルに入れたり出したりの繰り返しを楽しんでいる。変わらず虫探しをしている子もいる。



もぐらの道作りを模倣して桶を探して水を流す遊びをする子どもたち



もぐらに栄養を与えないといけないといっご馳走つくりをする。

もぐらの誕生会をしようと大きな砂のケーキに花を飾って誕生会をする。



・帰りの会でもぐらの話をしたことは、子どもたちのめあてとして戸外遊びがより充実するようになった。ただ遊んでいるのではなく、子どもが発した大切な言葉を聞き逃さず、子どもたちが共有するための教師の存在がそこにあり、指導性があると考え。

・会話の中をよく聞いていると、自分たちが今まで生活してきてうれしかったこと、楽しかったことが遊びに反映されていることが分かる。お母さんに言われている言葉であったり、楽しい経験であったりしている。子どもたちの生活体験を更に遊びに取り入れていく子どもたちの心の豊かさが伺える。

・もぐらという共通のめあてはもっていても子どもたちの遊び方は様々である。一斉に教師が引っ張るのではなく、子どもたちの考えが遊びにつながっていくことが望ましいと考える。



・友だち同士の会話の中で『もぐら』という会話が頻繁に聞こえ、もぐらという言葉が合言葉のようになってきた。子どもたちはただ何となく遊ぶのではなく共有するものがあることで、友だちとのつながりが深まったり、遊びの想像する力が高まっていくものである。 ・雨の日が多くなり、部屋での遊びを余儀なくされた子どもたちは、戸外の遊びと部屋での遊びに違いがあると教師は判断した。

広	・雨が降って戸外に出られない子どもたちの様子を見る。W子「もぐらさんどうしているかな？」 - というつぶやきだった。T「雨が降ってどうしているかな・・・」と共感する。 - W子・S子・K子・T子が病院ごっこを始める。 - S子「もぐらの病院です・・・」と言う。 - T子「熱が出たらこれ飲んでください」 - W子「ヨーグルトも食べると熱が下がります」 - N子聴診器で診察をする。	・折角戸外遊びが充実しているのに、雨でその遊びがなくなることに抵抗がある。できればもっとこの遊びを続けて欲しいと願う。しかし、子どもにとって戸外も室内もないと思った。なぜなら子どもたちが自ら見出した遊びに楽しさを感じていれば室内でも継続することがわかった。その子どもたちの姿をきちんと見届ける目を持たなければならないと思う。 ・室内では、環境として素材や積み木、ダンボール積み木などを準備して置いた。子ども
	 人形を相手に、遊びが進み一見もぐらからはなれて遊んでいると思うと、「もぐらさん気をつけて」の会話を発するが誰も違和感を感じず遊びがどんどん進んでいく。 ・部屋でも同じく、自分たちの遊びに向かって遊びを続けている。  もぐらの学校  もぐらのレストラン  もぐらの汽車ごっこ  もぐらの宅配便の駐車場	たちが自由に使える素材を色々と工夫している子どもたちの創造力に驚く。環境をどのように考えて出すか、遊びを進めるため大変重要であることを改めて認識した。 ・室内では、環境として素材や積み木、ダンボール積み木などを準備して置いた。子ども
く	・「先生 積み木を貸してくれん！」「汽車に乗せてくれん！」のケンカが多くなってきた。とても良い経験を積むことになる。	・自己主張ができることを認めつつ、子どもたちにどのように遊べばいいかの指導ができる大切な場として見守り、指導をする。

考	・3歳児が自ら選んで遊びを展開していく過程には教師の存在が大きいと感じている。子どもたちの遊びを認め、共感していくことで、安心をして遊べる環境が必要である。そのために教師は子どもの何を共感し、その遊びから何を読み取り明日の保育につなげていくかを常に考えることが大切である。 ・3歳児は「広く」の体験や経験を重ねていくことが大切であると考え。教師が遊びの主導権を握ることではなく、あくまでも子どもが見出して楽しむ遊びをしっかりと理解し、支えることが教師の役割である。 ・ケンカや物の取り合いなど3歳児らしい行動も出る。自己主張が出来ることを認めつつ子どもに倫理観を伝えるチャンスと捉えながら、子どもの心の内面理解に努めることが大切である。
察	

2) 4 歳児(はと組)の実践

4 歳児の発達を迎えると、子どもたちの心の成長に変化が出てくる難しい時期に入る。特に母子不安が出たり、急に幼稚園を嫌がるなど様々な型で現れる。この時期は進級した喜びと同時に不安感をもつためにどのような遊びで取り除いていくかが問われる。教師の指導性を振り返る時期でもあると考えている。

新入児 1 名 継続児 9 名合計 10 名のクラスである。担任も新任教師のため子どもとの人間関係（信頼関係）作りから保育を見守ることとした。

視点	幼児の活動	教師の指導性と考察
広 く	 ・道路を歩くと 「先生 ○○の車が いた!」「あっあの 赤い車なに?」車 に興味をもつ子どもが多い。川沿いではカエル や花を見つけたり園に持ち帰ったりする。  ・数日かけて園外に出かける。園内では 数人の友だち と道路側のフ ンスに上り何 やら会話が弾 んでいる。  友だちも集まっている。 K児「あの車は働く車だ!」 S児「白い車は僕 の家の車と一緒に!」と本物の車を見ながら話 しが弾んでいる。  自分の乗り物図鑑を 持ってきて得意にな るH児 	・4月 子どもたちとしっかりと関わりたくて 園外に出かけることにした。お互いに慣れない まま保育室にいても保育として成立しないの ではないかと考えた。近くの川沿いを歩いた り、草花摘みをしたり、公園で思い切り走 ったりして子どもとの関係づくりが必要 と判断した。 ・子どもたちの遊びを見たり、つぶやきや会話 から小動物（カエル・ザリガニ・おたまじゃく し）や草花に興味があると思っていたが子ども たちの興味は車であったように感じ、更に子ど もたちの様子を見なければならぬと感じる。 そのことが今後の遊びにつながって子どもが 自主的に遊びこんでいってこそ遊びと考えし ばらく様子を見ることにする。 ・部屋に車の本や小動物の図鑑を置いて置く。  車の絵本をそっと置 く。特別な言葉はか けない。 みんなで乗り物の図鑑や絵本をよく 見るようになってきた。

広	S児「僕はパトカーが一番好きだ！」 T子「私は消防車が好き！」 M子「バスは人がいっぱい乗れてバスがいいな・・・」と話しが弾む。絵本や図鑑を見ながら車の色・形・大きさについて話す。 S児「園長先生の車は黒・・・だ」と職員の車もよく知っていて会話に出てくる。 ・S児とT児が教材庫で何やら探し始めた。  S児「これは小さいから・・・こっちは1個しかない・・・」 T児「これでいいや この蓋でやってみる！」	・子どもたちの興味関心が「車」に関する遊びではないかと感じたので、車の話しを子どもと一緒に楽しむことにする。 ・車をどのようにして遊びにしていけるか教師は迷う。車作りなのか、戸外で道や町の遊びにするか子どもの反応を気にしながら保育の構想をして見る。 ・S児・T児についていくと、教材庫で車のタイヤになるものを探し始めた。フィルムケースの蓋やペットボトルの蓋、丸い物を探している。この姿こそ教師はしっかりと認め活動の意欲付けにしたいと考えた。
く	  ・ボンド・ガムテープ・素材選びをしながら、自分の作りたい車作りが始まってきた。 T子「私は絶対に消防自動車！だってみんなのためになるもん・・・」M子「私はやっぱりバスみんなが乗れるとうれしいが・・・」Y児「パトカーもみんなを助けるよ！」とつぶやいたり会話が聞かれる。 ・Y児「出来た！」と喜んで道具棚の上に並べる。次々と作った車で遊ぼうとしない。 T子「私の消防車 見て！素敵でしょ・・・」とは言いが、後ろの道具棚の上に並べる。次々と道具棚の上が駐車場のようになってしまっている。子どもたちは朝、登園すると車の確認をするがそれを使って遊ぼうとしない。	  ・教師は車を作って欲しいと願いがあったので車作りを始めた時は、保育の構想通りだと喜んだ。材料を選び、作りたい車に向かっている子どもを見ながら「どこを工夫する？」「パトカーはそれでいいの？」とできればだけに目がいっていることを反省した。出来ばえを気にすることで子どもたちの活動に負担をかけていると思った。 ・出来た車で遊んで欲しいと願うが、誰一人として出来た車で遊ばない。この様子から、作ることが遊びであって、出来たことで車の遊びは終わったのではないかと判断する。このままでいいのかという疑問だけが残るが次の手立てが見つからない。

・作ったもので遊ばない子どもたちの内面をどのように受け止めたらいいいのか全く理解が出来ずにいた。部屋で車遊びはほとんどしなくなったが、図鑑や絵本は続けて興味深く見ている。ここで子どもたちの遊びに大きな変化が見えた。それは、戸外の築山で道作りが始まったのである。この道作りを様子から子どもの内面に添ってみたいと考えた。

・築山をシャベルやスcoopで掘り始めている。



I児「硬いぞ・・・なかなか掘れない！」

M子「水持ってきたら・・・」

S児「僕水運ぶ・・・」ペットボトルに水を入れて運び始める。

M児「ここ硬かったけど、水いれたらセメントになった！」とはと組の子どもたち全員が集まって楽しそうに道作りを飽きることなく始めた。



・雨天が続き、室内の遊びになった。ダンボールや積み木など大きな環境を直ぐに使い始めた。



車の遊び場作りが始まる。

・K児「競争しよう・・・」と提案する。

自分の作った車をもってしばらく遊ぶ。

・毎日 遊び場を作ることを楽しみに、様々な場作りを楽しんでいる。よく走るためには傾斜、長さ、でこぼこ道などを工夫したり、考えたりする。

く M児「こっちは直ぐ落ちるから、ガードレールを作らんと・・・」

I児「飛行場も作らんとH児君の飛行機がいるよ！」と次々と創造的な会話が弾む。

・子どもたちは生き生きと楽しそうである。深く深く掘って水を流すのである。水は勢いよく流れ子どもたちの歓声でその楽しさが伝わってくる。

なぜ子どもたちは、車作りから戸外に出て行ったのか、何が子どもたちの内面を動かしたのかその理由が分からないままにいた。その理由はやはり保育の評価しておきたいと思った。

①車作りの保育の構想がずれていたのではないか。・・・車を作って欲しい・かっこよく作ってほしいという願いが強すぎた。

②その後の遊びに対する教師の構想ができていなかった。・・・教師の考えと子どもの考えが大きくずれたことで子どもが戸惑ったのではないか。

③子ども理解と言いつつ何を理解しようとしていたか。・・・子どもたちのつぶやき、会話を聞き逃して居たのではないか。

・室内で車遊びをするか不安もあったが、ダンボールや積み木を部屋に置いておくと直ぐにそれを使い始めた。車作りのときからその環境を準備したり、子どもと一緒に考えなければならなかった。



・教師は子どもたちの発想にうれしさを感じ、保育の構想の大切さを改めて感じ、保育の構想を書くだけではなく常に振り返り訂正しなければならないと感じる。



深	・子どもたちの車の遊びに変化が見られるようになる。どれだけ長く走るかの競争をする子どもたち。電車や車が走るための線路や道路を作り始める子が出てきた。 <電車や車の線路や道路作り>	
く	H児「信号機やガードレールがないとぶつかるよ」 T児「そうだわ・・・線路はこれ使うか」とビデオテープを探してくるなど工夫する。 M児「飛行場がないと僕の飛行機が飛べん！」飛行場作りをする。 ・実際に自分の作った車や電車を走らせて、様子を見たり、修理をしたり繰り返す楽しむ。 H児「わートンネルが倒れる～早く修理をしないと事故になるよ・・・」と大声をだす。近くにいた友だちがセロテープやガムテープをもって集まり修理する。自分たちが作った遊び場所が壊れると大騒ぎで修理する。 <もっとスピードを出す車がいいな> ・K児・S児・T子・Y児はスピードの出る車に熱中して遊んでいる。Y児はパトカーでないとダメといていたが、ティッシュペーパーの箱に車輪をつけた簡単なものを作って走らせようとしている。  Y児は走らせて見て「走るけどあんまり進まないよ～」と考え込む。 K児も「軽すぎるわ～軽いと走らんわ～」	 ・子どもたちは誕生してからの生活体験や体験を必ずといっていいほど遊びに取り入れていることが分かる。その子どもたちの体験や体験を日々の生活で更に積み上げていくことで、子どもたちの遊びがもっと豊かになっていくのではないだろうか。 ・スピードの出る車に興味をもった子どもたちはどうしても走らせたいという強いねらいをもっている。そのねらいを達成させるために子どもたちの「考える力」を尊重して教師は子どもに寄り添っていきたいと考える。 ・環境として錘になるものを教室に出しておく。積み木・粘土を出す。

深	T「どうして軽いと走らないの？」と聞く。 Y児「だって競争しても走らないもん」 K児「軽いもん・・・」軽いということを強調する。木片・粘土を置く、粘土を使って重さの調整をすることに気づく。 簡単なティッシュペーパーの箱で出来た車には粘土の出し入れが簡単で重さの調節もしやすいのでこの箱を選んだと思う。	・粘土を車に入れてみるとよく走ることがわかる。軽いと走る距離が短い、重いとスピードが出て長く走ることが分かる。重すぎると走らないなど試して考えて活動をしている様子に感心する。この気づきを認める。
く	・遊戯室や廊下の何もない場所を選んで走らせる。 Y児「ふくろう組さんまで走った！」 M児「僕は椅子のところまでいった！」 T子「私のは走らん…わ」 Y児「重さを考えると走るよ・・・」 M児「粘土の入れすぎだない？」と話す。 Y児「先生どれだけ走ったか図って！」と言う。 メジャーをもってきて図る。	・場所も選択して長く走る場所を見出していく。教師が率先して子どもに伝えるのではなく子ども自ら気づき活動するところに遊びのおもしろさを感じると思う。 ・誰が一番走ったか、どこまで走ったかは目で見れば分かるが、子どもたちは距離を測るという行動に出た。数字に興味を示してきた。子どもの気づきは素晴らしいと思う。 測った距離をを記録し、日々記録を見ながら自分の車の走らせ方、力加減、粘土の量を毎日調整する子どもたちは主体的に遊びに向かっていると考察が出来る。
	 みんなで道を思い切り描く。車も描く。体いっぱい描く。	 メジャーで距離を測る。  記録を記入！

考 察	・子どもたちが安心して遊べるようになると、様々な遊びが誕生するようになった。4歳児の揺れ動く心の変化に対応するために、出来るだけ全身、心も体も存分に動く遊びを楽しませたいと考えたが、子どもたちは「車」という最も身近なものから遊びを作り出していった。その子どもたちの遊びを支える教師の指導性が難しく、保育の構想を何度も書き直し、環境を考え、子どもの出方から教師自身がどのような「ねらい」をもっているかが問われていると思う。 ・子どもの遊びを支えるために、褒めることは勿論であるが、子どもに考えさせる言葉をかけることの難しさにも直面した。大人の考えを押し付けようとしたり、深く子どもの内面を理解せずに勝手な判断で対応したことが随分あった。教師の指導性について今後の課題が残った。
---	---

3) 5歳児（ふくろう組）実践

4月、いよいよ幼稚園では最も大きい組になり、喜びと、意欲が入り混じって子どもたちの表情がいつにも増して輝いているように見える。園舎内を堂々と歩く姿にもその成長を感じる。しかし、いよいよ本気で遊びに向かうと一瞬でその年長らしさが消えていく。どんな遊びをしたらいいのか、何がしたいのか戸惑っている様子が見え隠れする。その年長出発の姿は、毎年教師が会う子どもの姿である。

春、斐川平野を吹く風は尋常ではない。素晴らしい青空と、ものすごい風の勢いに子どもたちは心を躍らせる。その風が子どもたちの心を揺さぶり積極的に関わってくれる。教材庫にあるビニール袋を取り出した。風の遊びの出発である。3歳児も4歳児もビニール袋をもって園庭を走りまわが、今年度の年長はそのビニール袋を次々とつなぎ合わせた。何をするのか、何をしようとするのか見当が付かない。こうして年長組の遊びは出発した。

視点	幼児の活動	教師の指導性と考察
広 く	  ・ビニール袋をつないでみんなで園庭に持ち出して風の強さを確かめている。 K児「今日の風は・・・ちょっぴりだ！」 S児「強い風 弱い風が混ざっている・・・」 R児「まだ風が冷たい、冬の風と春の風が戦っているね・・・」と会話が弾む。 ・子どもたちから「飛行船」という言葉が聞かれるようになる。ビニール袋とつなげ中に入って遊びだすと「飛行船の中は色々な色が見える」などと楽しむ姿が見える。 T「飛行船ってなにに？」と問いかけてみる。 子どもたちは空を飛ぶものとしかなわない。R児「僕 調べてみる！」と絵本コーナーに行く。もっと飛行船のことを知りたいと話すので近くの図書館に出かける。飛行船の本を借りて帰る。 ・K児「飛行船ってエンジンで動くよ」 S児「236メートルもあると・・・」 F児「ゴンドラに人を乗せるよ」 A児「運転手はいるの？」様々な会話を楽しんでいる。 R児「やっぱり飛ばしたい！」	  ・この一連の活動に向かう時、教師は子どもたちの遊びをていねいに見ながら、子どもたちの会話の記録をしっかりととっておくことが大切である。子どもは詩人のような会話をしていることに感動する。 ・教師は飛行船と言う子どもの言葉を聞き図書館で飛行船の図鑑を探し、調べる。この出雲地方ではほとんど見ることはできない。子どもたちはどのように感じるかを見守る。 ・図書館に行くまでには、子ども自身様々な想像の世界であったが、より知りたいと言う欲求が大きくなったころ、図書館に行こうと言い出した。教師はこの言葉をまっとう、図書館に行くことを決定した。 ・教師は飛行船の遊びには限界があると感じる。しかし子どもたちの遊びの行方はじつくりと見ることにする。すかさずR児が「飛ばしたい！」の言葉のなかに大きな意味を見出す。

広	 ・ R児「先生 このビニール使っていい？」と聞く。 T「いいよ 何かいいこと考えた？」 R児「やっぱり飛ばしたい！」 ・ ビニール袋で遊んだり、風船も出して飛ばす遊びを毎日飽きることなく続ける。特に風船は息をいっぱい吹き込んで放すとおもしろい飛び方に大喜びをする。	  ・「飛ばすこと」にねらいをもった子どもたちに教師はホットする。これからが子どもたちの本物の遊びに発展すると予想する。 ・ 飛ばすことにねらいをもった子どもたちなので「飛ばす」＝紙飛行機も予想し部屋の環境を整える。 ・ 紙様々な種類（広告紙・新聞紙・画用紙・新聞紙・色紙） 大きさ（A4サイズ・B5サイズ・A3サイズなど） 硬さ・ビニール袋・傘袋・風船など ・ 子どもたちにとって、遊びとは、自ら考え工夫し、調べて遊べるから楽しいのではないかと考えた。
深	しかし、この遊びも少しの間続くが、停滞し始める。 T児・K児・A児・R児・H児・F児たちが紙飛行機遊び始めている。 風船遊びはM子・H子・S児が続けている。 K児「飛行機は目に見えない風で飛ぶよ・・・それは空気のこと」と言い切る。「あと、重さも大事だよ。新聞紙は大きくてやわらかいからだめ！たまに飛ぶこともあるんだよな・・・」と話す。 K児「飛ばし方もあるんだよ。足を前に出して手を思いっきり引いて飛ばすよ」 T児「あっ！まっすぐ飛ばしてごらん。まっすぐにして！」と言う。 K児「先生 言ったでしょ。足を前に出して手を引いてやってごらん・・・」  ・ H児「先生本気だね」と褒められる。	・ 子どもたちが一生懸命遊ぶ姿から、教師も本気で遊んでいたかを反省する。なぜなら子どもにだけもっと遊んで欲しいと言う願いを押し付け教師はそれだけで指導をしているような気になっているのではなかったかを反省する。 ・ 教師もきちんとした飛行機を折って飛ばす。子どもたちの「やはり 先生！」と言われたいと本気になるが、全く飛ばない。格好もよくいかにも飛びそうだが飛ばない。子どもの飛行機は飛ばないようだがその飛行機がはるか遠くまで飛ぶのである。 よく飛ぶというめやすをもたせるために、遊戲室にタフロープを張る。  タフロープ ・ 照れくさいがうれしい。本気で褒めてもらえるうれしさを感じることが出来た。

深	・朝から飛行機遊びが盛んになる。 遊戯室にタフロープをつけたことで、子どもたちの飛行機遊びに更に変化が見られるようになった。	・出来るだけスピードがあって、遠くまで飛ばせたいというしっかりとしためあてがあり、自分の考えで挑戦する姿に教師も本気で向き合うようにする。
	・ K児「ビニールテープを切って重さをつけたよ！」 S児「僕は飛行機が小さいからホチキスで錘をつけるわ」 F児「僕は羽をつけたい！」と赤い羽をつける。 F子「私はしっぽをつけた。よく飛ぶよ！」	・ 朗報が舞い込む。出雲の空をブルーインパルスが飛ぶという情報があり、子どもに伝えらると「絶対行く！」ということになる。斐伊川の土手まで行く。子どもたちが何のために出かけるのか出かけることに本当に意味があるかを判断するが、今の遊びを考えると教師も本気で子どもと同じ気持ちになる。
く	・ 出雲の空でブルーインパルスを見ることなど皆無に近い。子どもたちは大喜びである。 「あっ もう行った・・・」「カッコいい！」と絶賛の声が上がる。自分たちが紙飛行機遊びをしているからこそ様々なことに気づくのである。「音がすごい!」「きれいに並んでいる」「煙がかっこいい」「煙を出したり止めたりする!」「先頭が一番いいな～」数分間のドラマを見たような気分になる。	・ ブルーインパルスを見ている子どもたちは本気である。来てよかったと教師も共に喜び合うことが出来た。 ・ この経験から子どもたちは、空高く青空に吸い込まれそうになる飛行機をみて、更に自分の飛行機の改良が始まった。 もっとスピード感のある飛行機 もっと滞空時間の長い飛行機 どんなところを工夫すればいいのか、その様子を教師は見守ることにする。子どもたちの想像力が働いている間は、あまり声をかけず活動の妨げにならない努力が大切だと考える。



戸外でも飛ばそうとする。S児
Y児は2つの飛行機を合体させて飛ばそうとす
る。

F児は飛行機の先を少し折り曲げてみる。

S児はそれまであまり飛行機遊びには消極的な遊び方であったが、インパルスを見てから急速に熱中して遊ぶようになってきた。

S 児「先生　紙飛行機は風があると飛ばないよ！　なんでだろう・・・風があるとよく飛ぶと思うけど・・・」と不思議に気づき解決しようとする。軽い・小さいという現実と風の強さ・弱さ一様ではない風の吹き方に気づき室内に戻っていった。

・子どもたちの発想力はどれだけのものか目を疑う。考えれば考えるほど子どもたちは生き生きと遊ぶ。教師が何も言わなくても自ら遊びを作り出すのである。S児は興味があまりないように見えていたが、実際は遊びたい、考えたい、スピードを出したいと思っていたと思う。ブルーインパルスに出会って心が大きく揺さぶられたのである。ここから本気で取り組み始めた。

・S児は同じ飛行機を飛ばしても無風状態の遊戯室と風のある戸外の違いに気づき何回も試した。しかし、紙飛行機は軽くて風には弱いことに気づき遊戯室に帰っていった。自分で納得のいくまで挑戦する姿が素晴らしい。



・必ず飛ぶ飛行機を作り、飛ばすことのできる子どもたちは、紙の質や大きさにこだわり小さい紙で作り、微調整を繰り返し、より滞空時間の長い飛行機へと向かっていった。メモ用紙のような小さい紙で折り、出来る限り滞空時間を長くしようと考え始めた。

H児は飛行機の微調整を何回もしている。

折り方も羽が広い折り方になってきた。

H児「羽の曲げ方が大事だけどな～」と繰り返す。飛ばすたびに羽の調整をする。

大きな紙・硬い紙・広告紙のような柔らかい紙ではなくメモ用紙のような小さい紙をよく使うようになり、滞空時間を競うようになってきた。

・ストップウォッチを出してきて滞空時間を計り始めた。K児とH子が図り始めた。

・紙飛行機のような遊びが、長く続くとは思わなかった。非常に単純で、飛ばなければおもしろさも楽しさも感じられない遊びである。子どもたちの中に何がこの遊びで育っているかを考察する必要があると思う。

＊紙飛行機に教師も本気で子どもと競争をし
お互いに切磋琢磨をしていったこと。

*子ども一人ひとりが存分に遊べる時間と空間を確保したこと。

*絵本や図鑑から見て学ぶ態度が育っていき、自分のめあてをしっかりともつことができてきたこと。

*環境を教師だけではなく、子どもと一緒に考えたことなどがあげられるのではないかと考える。

▶ 飛行機新聞を作っていた子どもたちは距離から滞空時間の記録を書いていた。文字が十分に書けないので教師に書くように求めてきた。子どもの言いたいことをそのまま書くことで子どもの思いを大切にしたいと考えた。



て い ね い に	・子どもの滞空時間の記録があまり伸びないという感覚があり「滞空時間が長い飛行機を知りたい！」という強い思いがあった。T「自分たちで工夫したからいいのではない？」と伝えるが、承知しない。K児「科学館に聞けばいい！」ということで、みんなで科学館に電話をする。科学館の先生に了解をとり、出かけることにする。      	・教師は今の遊び方で十分だと思っていたが、子どもはもっとよく飛ぶ飛行機という更なるめあてをもつ。そのことを子どもの立場教師の立場で考えると子どもの熱い思いを受け止めることにした。そのことで今後の活動への意欲づけにもなるのではないかと考えた。
	・新しい視点で、科学の先生に、広い場所で学ぶことに喜び、生き生きと先生に習う。 ・滞空時間の長い飛行機を教えてもらうというめあてをもって出かけたが、科学館の先生は、子どもたちが普段折っていた飛行機を教えてください。それでも科学館の先生に教わるという新鮮な思いが、子どもたちの知りたいという意欲が子どもたちの真剣な眼差しに現れている。教師はこの様子を学級便り「おひさま」にかき保護者と一緒に紙飛行機を共有できる題材としたいと考えた。	

・6月中旬まで続いた遊びである。7月13日の夏祭りに向かってどのような活動をするかを全員で考えることにした。そこには紙飛行機で遊びこんだ自信で「なんでも出来る！」と言う表情である。教師は「夏祭り楽しみだね。ふくろう組はどんなお店をする？」と問いかける。子どもたちは全く予想もしない答えを返してくれた。「それは勿論・飛行機迷路だわね」「そうだよ。飛行機迷路だよ」と口をそろえて言う。教師は色々な物を作って販売と考えていただけに驚きを隠せなかった。 「先生 早くダンボールをもらいにいこう」「いっぱいいるよ！」と活動を始めた。

T「飛行機迷路ってどうすること？」と聞く。 K児「迷路を通していろいろな飛行場に行く！」	・飛行場は日本・ロシア・グアム・カナダになった。
---	---------------------------------

て い ね い に	F 児「世界の飛行場に行くの・・・」 S 児「迷路の上に紙飛行機を載せるといい」 M 子「う～ん でも迷路の中は暗いが・・・」 F 子「夜の空だわね・・・」 I 子「わかった！夜の空ね」 ・世界の飛行場を調べる K 児・M 子・S 児・R 児・A 児は早速絵本コーナーから図鑑を持ってきて調べる。 ・箱をつなげて迷路作りをし始めた Y 児・H 児・F 子・I 子・F 児たち ・飛行場も決まり、箱もつなげると A 児「つばめ組やはと組さんと呼んで遊ばせてあげよう」と提案した。   チケットを切ってもらって。  お祭り当日は「いらっしゃいませ！」とお客さんと呼び込みます。お父さんお母さんは迷路が細くてと通れませんでした。悪戦苦闘でした。 ・子どもたちの活動を信じ、子どもと共に活動していく楽しさをしっかりと体験できた一学期の活動である。	・夏祭りと言う楽しいことの経験をしている子どもだからその経験を忘れないでいるという子どもたちの心に刻まれていくものを考えると、教師はしっかりと保育を積み重ねることの大切さを改めて感じる。 ・3 歳児・4 歳児の子どもたちに早く楽しい経験をさせたいという流行る気持ちも様々な自信からきていると考察する。教師は子どもの意見を聞くだけではなく、教師自身も共同作業員として意見を言って、子どもに受け止めてもらいながら、みんなで創りあげた飛行機迷路になったことは、大きな絆になっていた。  友だちと楽しそうに迷路を進む 3 歳児の子どもたち。 ・「子どもから学ぶ」という言葉があるように、教師は子どもの言いなりになることではなく、子どもの活動の何を認め、何に価値を見出し伝えるかに尽きると思う。 教師主導だけでも保育は成立しない。子どもの好きな遊びだけでも成立しない。保育は難しく、それでも楽しいのである。
-----------------------	---	---

考 察	・年長組は今年度も「風」との出会いから遊びが始まった。教師は子どもたちの積極的な行動をしっかりと支えていきたいと考えた。飛行船という教師が全く想像もしていなかった遊びに発展しそうになったが、子どもの遊びをしっかりと見てみると、何がしたいのか、何に目的をもっているかが解かり子どもとの共同作業の楽しさを感じることができた。 ・子どもたちのもつ「遊びのエネルギー」をつぶさないために、エネルギーが完全燃焼していくための教師の指導性は大変大切でありその指導性を改めて考える時、「教育」という観点から指導性を見出して子どもに向かっていく姿勢が必要であると考えた。但し、子どもたちの思いや、考えに沿っていなければ指導にはならないと思う。 ・紙飛行機という誰でも一度は経験している遊びを、子どもたちは、様々な考える力で創りあげてきた。教師の折り方は立派できれいな飛行機は飛ばないが、子どもたちが折る飛行機は折り方も粗雑であるにも関わらず何メートルも飛び、滞空時間も長く驚くが、その過程の学びが遊びとして成立したからであると考えた。子どもたちのもつ「考える力」をもっと育てたいと思う。
--------	--

8. 全体考察

1) 主題から 「広く、深く、ていねいに保育の質を考える」

・この主題は保育をする上で大変意味深いものであると考え、この主題を掲げ実践を重ねてきた。

幼稚園教育では子どもたちの遊びをどのように捉え、支えながら身に付けさせるか学校教育の始まりとして考える時、大切な幼児教育を担う幼稚園は真剣に取り組まなければならないと強く感じている。

今年度中国地区代表として発表をさせていただく機会に恵まれたことを契機として更にこの主題のもつ意味から保育実践を重ねたいと考え、3歳児・4歳児・5歳児の発達から実践発表をすることとした。(全日の主題でもあった)

・「広く」「深く」「ていねいに」の主題の意味を、次のように考えることが出来る。

「広く」

子どもたちの身の回りの全てから感じる経験と捉えたい。身近な小動物であつたり、草花であつたり天候や、遊具、素材等子どもたちの身の回りで見つける遊びの「興味・関心」全てであると捉える。3歳児がプラタナスの大きな木に興味関心をもって遊びにしていく過程からも言えると思う。4歳児の道路を走る車に興味関心から車の遊びが始まることや、5歳児は園庭を吹き抜ける大風がきっかけになることから、子どもたちが見たり聞いたり、触れたりするからこそ、遊びとして出発していくことが理解できると思う。どれだけの経験をたくさん積み上げることを「**広く**」と捉えたい。

「深く」

思う存分様々な経験を積み重ねた子どもたちが「この遊びをしたい」という目的ができると色々な方法で遊びに向かっていこうとする。その過程が大切な「**深く**」であると考え。その「深く」には、考える・工夫する・調べる・試してみる・喜びをもつ・挑戦する・友だちと一緒に考えるなどが含まれる。すなわち子どもたちが存分に遊びに没頭する環境の中で、思う存分遊びを楽しむことを「深く」と理解したい。その遊びの方法は一樣ではなく子ども一人ひとりの感性にゆだねられるものでなくてはならないと思う。教師主導であつたり、子どもの思いのままではない。そのことを履き違えをすると「深く」の域に入ることは出来ない考える。

「ていねいに」

子どもたちの遊びが「深く」から更に発展していく場合を「**ていねいに**」と捉えることとした。特に年長児がこの部分に当たると思う。もっと考えよう、もっと楽しくしよう、もっとおもしろくしようとする活動から言えるのではないかと考えた。科学館で学ぼうとしたり、夏祭りは1学期の遊びから発展させて自分たちで創りあげるという行動が「ていねいに」と受け止めることと考えた。

・この「広く」「深く」「ていねいに」と言う主題から実践をして改めて考察をしてみると、一日の流れの遊びからも言えることであり、年少から年長までにつながる過程もそのことが言えるのである。3歳児は「広く」の時期とし、4歳児が「深く」の時期に入り5歳児が「ていねいに」の時期に入るといえるのではないと思う。必ずしも、この通りには行かないが、3歳児で多様な経験を積み上げ4歳児は多様な経験を積み上げたその経験を生かし更に自分の力で遊びを創造していく力を蓄え、5歳児の主体的な活動へと導き出されていくのではないかと。強いては小学校教育へのつながりになると考える。

2) 教師の指導性について

・教師が存在する意味は、どこにあるかを問う必要がある。今子どもの何を育てたいか、子どもの育とうとしている芽を摘んでいることはないか、子どもの今がきちんと見えているか、教師は自分自身を常に問うことが大切である。子どものつぶやきに耳を傾け、その意味の深さ、奥深さを理解できている

かを問い続けなければならない。子どもが求める教師像は、自分たちの遊びを理解してくれる先生、自分たちの遊びを認め拍手を送り背中を押してくれる先生、子どもと一緒に考えたりヒントを与えてくれる先生、子どもの遊びの意味を捉え伝えてくれる先生でなければ、子どもたちは意欲をもって遊ぶことはできないと考える。教師は子どもにとって灯台のような存在でなければならないと考える。

・そのような、教師像は保育の構想が出来るかどうかに関わってくる。子どもたちの遊びをしっかりと指導計画・保育の構想にもちつつ、子どもたちの遊びを見つつ常に修正し、本気で子どもたちが安心して遊べる環境にならなくては、真の幼児教育に向かうことはできないと考える。幼稚園には教科書がないその教科書は教師が作っていかなければならないと考える。それだけに幼児教育の醍醐味があると感じている。子どもたちの素晴らしい力を見出し育てることができる教師でありたい。

< 3 歳児 みんなで描いたもぐらの絵 >



< 4 歳児 道が出来た！ >



< 5 歳児 飛行船に乗って行こう！ >



絵を描いたりすることは、遊びの延長で行っている。3歳児のモグラさんの絵は遊びがとてもおもしろくなってきてからみんなで描いた。4歳児の道は初めて年長になって園外に出て様々な道を歩いた後に描いた絵である。

5歳児の宇宙船の絵はこれから宇宙船に向かって正に遊びが始まるであろうという時に描いた絵である

遊びが充実してくると子どもの絵も伸びやかになってくる。

9. まとめ

この研究主題を掲げ今年度は2年目である。子どもたちが思う存分生き生きと活動することは、子どもの心身の発達が助長され、「自分の力で考えて行動」できる子に育っていくことが、幼児期の心の発達は大人では想像できないほどである。そのためには教師の指導性の中で特に大切なことは「環境」でと考える。ただ物を出せばいい、どこか園外に連れ出せばいいではなく、子どもたちの遊びを理解しつつ子どもと一緒に環境を創ることも、子どもたちの遊びを支えることにつながる。教師も環境の中の一員として本気で取り組んで生きたい。今後は子どもにとっての環境について更に深めたいと考える。